

2021年12月26日降誕後第1主日説教

イザヤ書 61 章 10 節－62 章 3 節

ガラテヤの信徒への手紙 3 章 23－25 節、4 章 4－7 節

ヨハネによる福音書 1 章 1－18 節

12月24日（金）に降誕日前夕の礼拝と深夜の降誕日第一聖餐式、そして、昨日の25日（土）には降誕日の礼拝を沢山の方々と一緒に捧げることができました。コロナ禍の様々な困難がある中、教会に共に集められて、『聖書』から学び、聖餐の恵みにあずかれましたこと、心から感謝したいと思います。集まってくださった方々の数を予想するのを間違っしまい、再度の聖別となっしまい大変失礼いたしました。

本主日は、降誕後第1主日、2021年最後の主日です。4月に赴任して、クリスマスの頃になって、やっと皆さまと一緒に礼拝ができるような日々ではありましたが、2021年も皆さまのお祈りとお支えありがとうございました。改めて来年2022年も、よろしく願いいたします。

さて、本日の福音書は、降誕日より少し長い個所ではありますが、同じ個所です。降誕日の礼拝で福音書から学びましたので、本日は、使徒書の「ガラテヤの信徒への手紙」を中心に、学びたいと思います。

「ガラテヤの信徒への手紙」は、「ローマの信徒への手紙」と並び、律法と信仰との関係について、パウロの神学がよく表れている手紙です。火曜日に学んでいます「テサロニケの信徒へ手紙一」など、最初のころに書かれたパウロの手紙は、そうではありません。それはおそらく、初代の教会の中でも、ごく初期の段階では、律法についてまだ明確な見解が、成立していなかったからだと思います。

降誕日の礼拝でも触れましたが、パウロが活動した初代の教会と、現代のわたしたちの教会とでは、いろいろな違いがあります。その一つが『聖書』という存在の違いです。パウロを始めとして、初代教会の人々にとって、『聖書』は旧約と続編です。また、教会という集まり自体が、ユダヤ教と明確に分離している状態でもありませんでした。それらは、律法の重要さにかかわります。わたしたち現代の教会にとって、律法は、大きな存在ではありませんが、初代教会の人々にとって、律法は大きな存在であったのです。また、初代の教会にとって、律法は、信仰についてだけでなく、生活一般についても定める、重要な存在でした。

教会、とくにプロテスタント教会では、ルターの影響もあり、律法か信

仰かという二者択一的な神学を形成します。そして、その根拠はパウロにあるとします。しかし、パウロは、イエス様をキリストと信じる信仰に入ったら、律法をすぐに廃棄してよいと考えていません。むしろ、律法をどのようにとらえたらよいか、深く悩んでいました。本日の箇所は、そのことが示されています。

3章23節でパウロは、「**信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視され、この信仰が啓示されるようになるまで閉じ込められていました**」と述べます。「監視する」は少し強い表現ですが、元来の意味は、「守る・防衛する」ということです。そして、次にある「閉じ込める」は、「取り囲む」という意味の言葉です。「監視され、閉じ込められ」という訳文は、パウロを律法に批判的な人ととらえたがゆえの結果であると思います。しかし、パウロは、律法との関係に悩んでおり、決して単に批判的なだけではありませんでした。それゆえ、「律法に守られ、囲まれていました」と訳すこともできると思います。そのように訳しますと、この節のイメージはかなり変わります。いずれにしても、パウロはここで、律法とは、人間を守り、そして導いていたと語っていることは確かです。しかし、イエス様をキリストと信じる信仰が現れて、彼は変わったのです。

パウロは変わった結果、次のように述べます。「**こうして律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです。わたしたちが信仰によって義とされるためです**」(ガラ3:24)。ここにある「養育係」という言葉は、パイダゴゴスという言葉です。教育の歴史について学んだ方は、聞いたことのある言葉だと思えます。パイダゴゴスという言葉は、「子ども」と「導く」という二つの要素から形成される言葉ですが、意味もその通りです。アテーナイなど古代ギリシアでの教育係、教育奴隷のことです。家庭教師の語源とされることもあります。

学校における教育がない古代ギリシアでは、子どもの教育は、家庭で行われていました。パウロは、このパイダゴゴスという言葉を用いて、律法の役割について説明しているのです。つまり、わたしたちは、イエス様をキリストと信じる信仰に入り、成人した大人となった。だから、もはやパイダゴゴスは必要ない、その役割は終わった、律法はそういうものであるということです。律法の存在自体と価値は否定していませんが、もはやキリスト者には必要なくなったということです。

パウロは、これらの説明によって、律法は重要なものであったが、もはやキリスト者には必要はなくなったと主張するがゆえに、次の結論を述べます。この部分は、聖書日課では省略されていますが、「**あなたがたは皆、**

信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです」(ガラ 3:26) という結論です。ここにある「子」は、大人ではない教育の対象の子ども、という意味ではありません。本日の福音書、「ヨハネによる福音書」1章12節にある「神の子の資格」という表現の「子」とも異なります。イエス様が「神の子」と呼ばれる時と同じ言葉です。キリスト者は、信仰を通して、養育係から離れて、イエス様と同じようになる、パウロはそう主張しているのです。それは特権にある「似姿の回復」という意味と同じといえます。その意味では「神の子」と訳語が同じとなっていますが、「ヨハネによる福音書」とここでのパウロの手紙とでは、意味が異なります。

さて、本日は、2021年最後の主日です。今年一年を振り返るだけでも、国の内外で、様々な事件や出来事がありました。昨年の2020年に始まったコロナ禍は、今年2021年を通してはまだ終わっていません。それ以外にも、様々な事件や事故がありました。それらの振り返りから様々なことがわかりますが、新しい禍や事件や事故が起きるとき、法律という事柄と関連させて考えるならば、従来の法律では不十分であることが多くあること、あるいは、法律が現実の出来事に追いついていないと事例が少なからずあったことがわかります。詳しくは述べませんが、コロナ対策なども、昨年も今年も、政府の決断による超法規的な措置で乗り越えた部分もあったようです。

聖書にある律法と、現代の法律は、起源も内容も異なります。しかし、法律という意味では、機能もそれが人間に影響を及ぼす範囲も同じです。わたしたちは、イエス様をキリストと信じる信仰を持ちますが、しかし、同時に、日本国、そして国際的に共通だと思われる法律の監視下・保護下にあります。それは、他の国の人々も同じです。わたしたちは今も、法律を養育係として、法律に守られて生きているともいえるのです。

その意味では、法律に関するわたしたちの状況とパウロの状況は、同じといえると思います。パウロは、律法は養育係であり、その役割を終えたと主張しますが、ローマ市民としてローマ帝国の法律を守っていたからです。

それでは、律法という養育係は、もはや必要なくなったと述べることによって、パウロは、何を語ろうとしているのでしょうか。それは、法律を超えた世界に生きることだと思います。イエス様を模範として、主なる神を愛し、互いに隣人として愛し合う世界に生きるということです。パウロは、イエス様をキリストと信じる人は、そのように歩むことができる、そう語っているのだと思います。そして、その世界は、いつの時代のどの法

律も超える、そう考えていたのだと思います。

パウロがすぐれているところは、イエス様に出会ってその確信を得たのではないということです。つまり、イエス様との人間的な出会いや体験から、その結論にいたったのではないということです。それでは、いつその結論に至ったのでしょうか。それは一言でいえば、復活のイエス・キリストに出会ったからということですが、おそらく、自分が迫害している教会の姿から学んだのだと思います。つまり、パウロが出会った初代の教会は、そのような愛に満ちた人の集まりであったのです。パウロにイエス様への気づきを与えるような、そして真摯な律法学者であったパウロを変えらるような集まりであったのです。それは、決して完成した姿ではなかったと思いますが、愛に満ちた集まりであろうと、努力していた集まりであったと思います。

教会は、基本的には、週に一度しか集まらない人の集まりです。それは初代の教会も同じです。わたしたちの教会は、コロナ禍で週一回の集まりですら、ならなかなかなか成立しませんでした。礼拝場所も明確に定まらず、制度もまだしっかりと決まっていない、時に迫害もあった可能性もある初代の教会も、同じであったかもしれません。また、パウロが、普段はローマ帝国の法律にもとに生きていたのと同じように、現代のわたしたちも、普段は日本という社会の法律のもとに生きています。その意味では、法律は今でも有効です。しかし、だからこそ、教会がある。パウロはそのように考えのだと思います。そしてそのことは、わたしたちにとっても同じです。

イエス様を通して示された、主なる神様の愛によって、互いに愛し合うことを通して、ユダヤ教の律法であれ、ローマ帝国の法律であれ、それらを超えた人と人との関係を築く、それが「神の子」の集まり、教会の目標である、パウロはそう考えました。そして、その教会の輪が、少しでもローマの社会の中に広がるように、と願っていたと思います。

パウロが目指した教会の目標とそこから生まれる願いは、今も続いています。それは壮大な目標と願いです。そして、いつ目標が達成されるのか、願いが叶うのか予想もつきません。2021年が終わろうとしていますが、何も達成していないかもしれません。しかし、来年もその目標に向けて、わたしたちは歩み続けていきます。わたしたちが集められるのは、教会であるからです。そのことを改めて今年最後に確認したいと思います。そして、来年も主の恵みに満たされて、ご一緒に歩んでいきたいと思っています。